

# 流行語「恐妻」について

## 服部 このみ

### はじめに

論者は「○○族」に代表されるような、ある一定の傾向をもつ集団を指す流行語と、それを生んだ作品との関係について調べているが、源氏鶏太「三等重役」(『サンデー毎日』一九五一年八月二日号)翌年四月(三日号)をきっかけに流行した言葉の一つに妻に頭の上からない夫を意味する「恐妻家」がある。辞典や同時代評において、「恐妻」という言葉自体がこの頃につくられたという考えが確認できるが、強い妻とその妻を恐れる夫というモチーフが昔から多くあるにも関わらず、「恐妻」という言葉が一九五〇年代に初めて出てきたというのは不思議である。そこで本論では、「恐妻」という言葉がいつ頃出てきたかを再検討する。今回は調査の範囲が限られており、言葉の起源がどこにあるかをはっきりと示すことはできなかったが、調べた結果、一九二四年の時点で使われている言葉であることが確認できた。また、戦前から使われていた「恐妻」と戦後に使用・流行した「恐妻」の用例をそれぞれ詳しく見ていくことで、戦前の「恐妻」と戦後の「恐妻」の差異がどこにあるかを考えたい。

一では辞典や同時代の資料を通して、「恐妻」という言葉が一九五〇年代に流行した際に発明されたものと思われるというのが通説であるものの、流行時においても新語か否かという点については曖昧であり、再検討の必要性があることを示す。二では戦前に「恐妻」が使用された三つの用例を示し、先行研究において最も古いと考えられていた一九三八年以前より既に使われていたこと、戦前の「恐妻」は妻側の問題（妻の恐ろしさ）が明確なのが特徴であり、恐ろしい妻であるが故に妻に逆らうことができない夫を「恐妻家」「恐妻病」と表していることを指摘する。三では戦後の用例を示し、戦後の「恐妻」は妻に問題が設定されるのではなく、夫の後ろめたさにより妻を恐れるという意味合いに変化していること、妻を大事にする夫を指す「愛妻家」という言葉と表裏一体のものとして用いられていることを示す。

## 一・

宮本小次郎「恐妻・愛妻家列伝」（『サンデー毎日』一九五二年二月二八日号）によれば、「一九五二年の日本で一番世間をにぎわしたものは「恐妻」であり、「新聞、雑誌、映画、放送、レコード等々日本のあらゆる分野」で流行したという。また、井上ひさしは「ベストセラーの戦後史」（『文藝春秋』一九八八年一月号）の中で「三等重役」について、「恐妻家の生態をこれほど微細にわたって描出した小説は初めてだった」と、「恐妻家」の流行に「三等重役」が大きく貢献したことを述べている。確かに、後に検証するように「恐妻」という言葉は「三等重役」連載中の一九五二年三月頃から新聞で多く使われるようになる。さらに映画「続三等重役」（一九五二年九月

四日公開)の主題歌で「とかなんとかおっしゃって やっぱり奥様こわいんでしょ」のリフレインが印象的な「恐妻節」(三木鶏郎作詩)の流行や、「恐妻時代」(一九五二年一月三〇日公開)、「恐妻キュット節」(一九五三年五月二七日公開)といった「恐妻」を冠した映画が公開されるのもこの頃である。これらのことから、「恐妻」という言葉の流行が一九五二年にあったこと、「恐妻」が流行するきっかけとなった作品が「三等重役」であることが読み取れる。

ただし、尾崎秀樹が「恐妻」の流行と「三等重役」の関わりを指摘しつつも「恐妻族」という言葉の発祥については未調査<sup>(1)</sup>であると述べるように、言葉の流行と発祥は別の問題である。「恐妻」という表現が用いられることはないものの、妻を恐れる夫を題材にした話は狂言や落語においても確認でき、流行した一九五二年以前からその言葉が存在した可能性もあると思われる。しかし、現在刊行されている流行語辞典および事典では、流行時にできた言葉であると考えられているようである。

たとえば、米川明彦『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』(三省堂、二〇〇二年)では「恐妻」という言葉は一九五二年の項に載っている。

大宅壮一の造語。この年、大宅のもとに群馬県の青年団幹部が訪れ、群馬県を象徴するような観光名物を考えてほしいと依頼した。大宅は親友で同県出身の阿部真之助(のちのNHK会長)がいつも妻にいじめられていることと、同県がかかあ天下で有名なことから、「恐妻碑」を建立することを提案した。

米川は参考資料として先に引用した「恐妻・愛妻家列伝」を挙げている。そこで「恐妻碑」のエピソードが掲載され、大宅壮一が「この騒ぎの火つけ役であり、勧進元であり、演出者である」と紹介されていることから「大宅壮一の造語」という説を採ったようである。

『日本国語大辞典』第四卷（小学館、二〇〇一年）には「恐妻」は「夫が妻をおそれること。」とあり、用例を徳川夢声、林麟、辰野隆によって書かれた『随筆寄席』（一九五四年）から引用している。また「恐妻家」は「妻をおそれる人。妻に頭のがらない夫。」と書かれており、用例で一番古いものは「三等重役」からの引用である。用例は「恐妻」も「恐妻家」も一九五〇年代のものを採用しているが、『日本国語大辞典』では「恐妻」の欄に「語源説」という項目を設け、日置昌一『ことばの事典』を参照に、「徳川夢声が、共済組合をもじって恐妻組合といったことから」生まれた言葉であると補足しており、徳川夢声による造語であるという説を採っている。

『ことばの事典』（大日本雄弁会講談社、一九五五年）では先述した徳川夢声の説を「昭和十三年の春ごろ」のことであると書いており、そうであれば一九三八年の時点で既に存在した言葉であるということになる。この説は「恐妻」の流行時、夢声自身によって何度か語られたエピソード（確認できた限りで一番古いものは『読売新聞』一九五二年八月一六日付の「忙月忙日」）であり、それを参照して書いた可能性が高い。

また、同時代の資料を参考によると『現代用語の基礎知識』一九五四年版（自由国民社、一九五三年）では「恐妻病」という項目で紹介されている。「妻に頭の上らぬ夫を指して言う」「阿部真之助、源氏鶏太等により広まった」とある。この場合は「広まった」とあるため起源を述べている訳ではないと考えられるが、ここでは大宅・夢声いずれの名も出ていない。さらに流行時「恐妻」について語られた資料も見てみたが、戦前から存在したという意見と戦後に発明されたという意見の両方が存在<sup>(2)</sup>し、流行時から言葉の起源（新語か否かという問題）は曖昧であったようである。

これらの資料からは「恐妻」という言葉の起源を特定することはできない。流行以降に語られたエピソードが挙げられているのみで、「恐妻」という言葉の用例という形では存在しないためである。そのため、用例によって再

検討することが必要であると考えた。

起源を特定することができれば一番よいが、今回の目的はそれよりも「恐妻」が流行時に作られた新語であるか否かを明らかにすることにある。戦後の「恐妻」流行の背景にはアメリカの家庭観・夫婦像の影響があると考えられるが、そのような思想を受け入れるために新しく言葉を作ったのか、以前からあった言葉に組み込んだのか、ということが論者の大きな関心であるからだ。そして後者の場合、流行以前の用例と比較し差異を明らかにすることで、ミツヨ・ワダ・マルシアーノが示した「日本のメディアに浮遊した「恐妻」「恐妻家」という言説・表象が戦後的であるとされる漠然とした社会の心性、あるいはこれら意識的に誇張された表象に内在する時代性」<sup>(3)</sup>がどのようなものかを探る手がかりになるのではないかと考えている。

実際に調べた結果、「恐妻」という言葉の起源がどこにあるかを特定することはできなかったが、一九二四年より既に存在していた言葉であることが明らかになった。以後、使用された年代順に詳しい用例を挙げる。

## 二.

ここでは、戦前の「恐妻」の用例にどのようなものがあるかを確認し、分析していく。今回は国立国会図書館デジタルコレクションを用いて調査を行った。調査は決して十分なものであるとは言えないが、今回の調査により少なくとも一九二四年には使用されている言葉であったことがわかった。

まず、今調査の範囲で「恐妻」という言葉が使われていた最も古い作品は三田村鳶魚『公方様の話』（雄山閣、

一九二四年）であった。この作品は徳川歴代將軍に関する話が十篇収録されているが、「春日局の焼餅競争」という話の中に「二代將軍は恐妻家」という項がある。前の項で秀忠の妻・江子が「嫉妬で名高い女」であることが示された後、秀忠の唯一の庶子である正之の存在が「御台所を憚って全く秘密にされ、江子の生前には父子の対面さへなかつた、思へば二代將軍も随分な恐妻家である」と書かれており、「恐妻家」という言葉が使われていることが確認できる。「恐妻家」についての説明がとくにないことから、当時「恐妻」という言葉が一般的に使われていたのかもしれない。また、妻の恐ろしさは示されているものの秀忠が妻に頭が上がらない様子が描かれているわけではないため、ここでは「恐ろしい妻を持つ夫」という意味で使われていた可能性も考えられる。

次に古いものは、佐々木邦「恐妻病者」(『面白倶楽部』一九二六年四月)という短編である。主人公の同僚の一人である「相馬君」とその妻の夫婦関係が話の主題となっている。主人公は会社帰りに飲みに行った際、「七時半になるとソーダ水を呷って脱鬼のやうに帰って行く」相馬君を見て、同僚たちと次のような会話をしている。

『そんなに細君がやかましいのかい？』

と僕は多少知らないでもなかつたが、初耳のやうに訊いて促した。

『逆もお話にならない。それに前身を洗へば御主人筋だから頭が上らないんだね。』

『御主人筋でなくても、あれぢや手に余る。大きいんだからね。僕たちは口で負けても腕づくで勝つけれど、相馬君は組み伏せられてしまふぜ。恐妻病にかゝるのも無理はないよ。』<sup>(4)</sup>

ここでは、現在の使われ方と同じ様に妻を恐れる夫を指す言葉として「恐妻病」という言葉が用いられていること、妻を恐れる理由が妻の体の大きさにあることが確認できる。佐々木の作品では当時のサラリーマン家庭を舞台に、亭主関白ではない対等な夫婦関係を築いている家庭が多く描かれている。佐々木は「恐妻病者」発表前後にも「夫

婦者と独身者」『主婦之友』一九二四年一月～二月号）や「主権妻権」『婦人倶楽部』一九二五年一〇月～翌年九月号）において妻に頭の上がらない夫を描いているが、彼らを表現する際には「恐妻」という言葉が用いられることはない。このことから佐々木は、妻が家庭の実権を握っている家庭の夫に用いるのではなく、字義通り、妻を恐れる夫を意味する言葉として「恐妻病」という言葉を用いていると考えられる。

最後に、平山蘆江『人間道場』（岡倉書房、一九三四年）に収録された「恐妻人情話」である。貞淑で儉約家の妻を持つ夫が妻に遊びを教える話（「貞淑地獄」）や、妻に給料の安さを指摘され、貯金を切り崩して出世したふりをする夫の話（「家持の花嫁」）、堅物の役者に代わり客先回りをし、家に帰らない妻に対抗して浮気をする夫の話（「時計からくり」）、妻の待つ家に帰るのを恐れる酔っ払い夫たちの嘆き（「三人上戸」）、浮気の代償に金をせびられる夫の話（「一心同体」）といった夫婦を題材にした話が五篇収録されている。この話ではタイトル以外に「恐妻」という言葉が使われることはないが、「恐ろしい女房」「女房が恐い」といった言葉が用いられるとともに、いずれの話にも妻の恐ろしさを示す特徴と夫が妻を恐れる様子が描かれている。ここで掲げられる「恐妻」は、「恐妻家」「恐妻病」のように下に体言を伴っていないこともあるが、妻を恐れる夫を指すというよりは、恐ろしい妻自身を指す言葉である可能性が高い。

ここまで見てきたように、戦前に「恐妻」という言葉が使われているのが確認できたのは、右の三作品のみであり、次に「恐妻」を冠した作品が現れるのは一九四九年である。国立国会図書館デジタルコレクションでは書名および目次を元にした検索となるので、本文のみで使われている場合は拾い出すことができない。そのため、一九二四年のものが一番古いと断定することはできないが、これにより徳川夢声が使用したという一九三八年以前から既に使われていたことが明らかになった。

「恐妻」という言葉は現代と同じような意味合いで使われているように思われるが、これらの作品には、なぜ妻を恐れるかについて、妻の嫉妬深さや身体的要素、過剰な儉約・束縛といった妻側の問題が明確に示されているのが特徴である。恐ろしい妻であるが故に妻に逆らうことができない夫を「恐妻家」「恐妻病」と表しているのである。これは後に示す戦後の「恐妻」と明らかに違う点であると言える。一方、単純に妻が家庭の実権を握っている状態を示す場合には、「嬪天下」が多く用いられている。こちらは一九一〇年代から三〇年代にかけて、まんべんなく使われていたようである。

### 三.

ここでは、戦後の「恐妻」の用例を確認する。主に近藤日出造によって使用された一九四九年の用例と、「三等重役」を発端とする一九五二年以降の用例に分けて説明をする。

まず、阿部真之助が「今週の話題」(『サンデー毎日』一九四九年六月二六日号)で「恐妻」についての話題を取り上げている。冒頭部は次の通りである。

恐妻クラブというものが組織されると、新聞が報じていた。近藤日出造が会長に推挙されたら、女房の許可がなければ、うけられないといつて断つたという。さすがに会長たるべき貫禄を示したものである。

ここで「恐妻クラブ」について補足をしておくと、「民芸」という新劇団体の後援会を作ることになった際、このメンバーなら助け合いの「共済会」ではなく、妻を恐れる方の「恐妻会」の方ができそうだということで盛り上がり、その時に出席していた近藤が恐妻会長に選ばれた、というエピソードがあったとのことである。その影響によ



り、この年には映画・演劇関係の雑誌において「恐妻」という言葉を用いた記事が数点確認できる。

また阿部は、恐妻は「現代日本の悩み」であるが「恐妻という事実は、現代に始まったのではなく、遠く神代に人類のそもそもの発端から、現われている現象なのである。」と述べ、イザナギ・イザナミやアダムとイヴ、ソクラテスや孔子を「恐妻家」の例として挙げ、恐妻という事実は昔からあるが「現代において恐妻現象が、かくだんに顕著になつてきたこと」が問題で、その原因は「女がかくだんに強くなつてきたこと」にあるようだと言べている。

この記事で注目したいのは次の二点である。一点目は、「恐妻」が単に妻が家庭の実権を握っていることを示す言葉となつてゐることである。佐々木は「主権妻権」で「哲学者の家庭はソクラテス以来妻権即ち主権で、女房が全権を握つてゐる。」<sup>(5)</sup>と述べており、ソクラテスのような「女房が全権を握つてゐる」家庭状況と、妻の恐ろしさによって逆らえない「恐妻病」の家庭を区別していたが、阿部は前者の家庭状況を「恐妻」であるとしている。二点目は、下に体言を伴わない場合にも夫を指す言葉となつてゐることである。戦前は「恐妻」のみで用いる場合には妻を指す可能性が考えられる言葉であったが、戦後は下に体言を用いなくても夫を指す言葉として機能している。明らかに妻に問題のあつた戦前の「恐妻」たちとは違い、戦後は普通の女性が「恐妻」の対象となつたこともあり、言葉の性質が変化したと思われる。

その後、恐妻クラブの会長に推挙されたという漫画家の近藤日出造が、「恐妻会」(『婦人倶楽部』一九四九年一月〜翌年一〇月)という題の小説を連載する。しかしこの作品は恐妻と関係の薄い物語が展開される中、最終話で突如恐妻会結成のエピソードが差し込まれるというものであり、物語内で恐妻の定義などが述べられているわけではない。のちに近藤はこの連載を振り返り、阿部と大宅に恐妻会会長という「名誉職を、あつという間に奪い去

られた」ことが「恐妻会」なる処女小説を連載した」きっかけであり、「僕が目途としたものは、小説の内容ではなく、「恐妻会」の題を一年間雑誌に掲げること」「近藤―恐妻会の関係」を読者に根付かせることが目的だったと述べている。<sup>(6)</sup>

『婦女界』一九四九年十一月号では「四十男が浮気を語る放談会」という題で、徳川夢声、藤浦洸、近藤日出造、田村泰次郎による座談会が組まれている。この座談会は本誌に「妻子のある中年男に恋をする、そして非常になやんでいるというような投書が沢山あった」ことから企画されたものである。その中で近藤たちは「浮気をするのは、中年男の通有性」であるとしながらも、「女房を愛してる」ために浮気はしないと述べるとともに、次のような発言をしている。

妻を愛し、尊敬するあまり、恐妻会員になるということ

記者 いろ／＼お話を伺っていますと、今日お集りの先生がたは、実に愛妻家ばかりお揃いですね。

藤浦 なにしろ恐妻会のメンバーでネ、噂によると近藤氏が会長で、僕が副会長なんですネ

徳川 僕らのほうは、ちよつとずれますが、十年ほど前に、恐妻組合というものがあつたでしょう。これに對抗して、われ／＼も作ろうというので、会長が小林一三か、阿部真之助がいいだろうというので、つまりですナ、世間で男らしい奴こそ、家庭における恐妻な男であり、円満とは、妻を恐れるということから発して、そういう組合を作ろうとしたことがありましてナ。

近藤 女房を尊敬し得るといふ亭主ですネ。

徳川 おそろゝのあまり、浮気ができん、僕の如きは……（笑）

田村 外でうまいことをしようという気持が、相当あるんじゃないですか、恐妻なんていわれていて……。

この座談会では女房を恐れるために浮気ができないとする一方で、女房を愛しているから浮気をしなとも述べており、「恐妻家」であることと「愛妻家」であることを結び付けている。ここからは妻を恐れる原因が、戦前の用例に見られた妻側の恐ろしい特徴・要素によるものではなく、妻を愛し尊敬しているが、浮気もしたいという夫自身の葛藤・後ろめたさによるものへと変化していることがわかる。

ここで結び付けられている「愛妻」という言葉も、元々は「愛している妻」を指す言葉であったが、一九二八年頃から女性誌などで夫が「妻を大事にすること」を意味する言葉として用いられるようになったようである。『日本国語大辞典』の「愛妻家」の項には「妻を人並み以上に大切にすること。いくぶん、からかう気持を伴って用いられることが多い。」とあるが、「恐妻家」とセットで語られていることからその傾向が見てとれるだろう。

ここまで、一九四九年の三つの用例を確認した。戦後「恐妻」という言葉・モチーフが注目され始めたのはこの頃からだと考えてよいだろう。この時期の「恐妻」は戦前の用例とは違い、妻の恐ろしい要素が示されることはない。夫側の後ろめたさから無条件に妻を恐れる夫を指す言葉となっている。さらにここでは「恐妻」であることを「女房を愛してる」ことや「妻を尊敬し得る」とことと結びつけている。発表媒体が女性誌であることから、この座談会における妻賛美がリップサービスである可能性は否定できないが、後にそこに描かれているような傾向を受け継ぎ、物語を通して確立したのが「三等重役」である。

「三等重役」で「恐妻家」という言葉が初めて用いられるのは第二三話「新年お目出とう」(『サンデー毎日』一九五二年一月六・一三日合併号)である。「三等重役」では、登場人物のほとんどが妻に頭の上がらない夫として描かれているが、第二三話以前はその状態を「嬬天下」と表現していた。このことから、「三等重役」における「恐妻家」が「嬬天下」と同義であることがわかる。また、第二三話では「何、愛妻家とは即ち、恐妻家なんだか

ら、どっちでもよろしい。」というセリフで初めて「恐妻家」という言葉が登場する。「三等重役」もまた初登場の時点で「恐妻家」と「愛妻家」を結び付けている。さらに「三等重役」では、一九四九年の時点では曖昧であった「恐妻」の定義付けを第二六話「恐妻家番付」（『サンデー毎日』一九五二年二月一〇日号）の中で行っている。

そもそも恐妻家とは何んぞ、という議論になった。それは愛妻家のことである、と前頭筆頭の高野営業部長が主張した。すると、桑原社長がいちばんの愛妻家ということになる、おかしいでは無いか、と異議を申し立てる者が出てきた。新婚の良人は、愛妻家ではあるが、通常、恐妻家では無い。してみると、恐妻家とは、家庭は絶対に破壊したくない、しかし、ちょっとした浮気なら内証でしてみたい、ヘソクリもうんとつくりたい、とまさに虎視眈々たる、そんな不逞な良人どものことでありそうだ。

ここでもやはり源氏は「恐妻家」と「愛妻家」を結び付けている。浮気心などからくる後ろめたさにより妻を恐れる気持ちはあるが、それは妻を愛する気持ちから現れてくるものだとしていることから、源氏もまた「恐妻家」を「愛妻家」の派生として見ていると言ってよいだろう。「三等重役」における「恐妻家」の定義は、一九四九年に語られた考えに基づくものであると思われるが、そこに出てきた考えをより直接的に、強固に結び付けており、読む側にわかりやすい考えに変化させたと言える。

そして一九五二年に「三等重役」で「恐妻家」という言葉が積極的に使われるようになると、新聞でも「恐妻」という言葉が用いられるようになる。一九五一年三月三一日付の『読売新聞』では、女房に怒られるのを恐れた夫が狂言強盗騒ぎを起こすという事件が取りざたされている（話の港）が、一九五一年の時点ではまだ「恐妻」という言葉は用いられていない。「一」で述べた徳川夢声「忙月忙日」（一九五二年八月一六日付）が『読売新聞』で「恐妻」が使われた最初の記事であり、それ以降積極的に用いられるようになる。ただ、「恐妻」についての話題は

通常の記事で扱われるよりも読者の投稿において言及されることが多かったようである。『読売新聞』の場合、とくに俳句の投稿で「恐妻」が用いられる例が多く確認できた。また、その傾向は『朝日新聞』においても確認できる。『朝日新聞』で最初に「恐妻」という言葉が用いられたのは一九五二年三月一日付の「ほくも一言」、その次に用いられたのは一九五二年五月四日付の「ひととき」でいずれも読者投稿欄である。それだけ当時の人々にとって関心の大きい話題だったということだろう。また、「ひととき」の冒頭は「『恐妻組合』などというものはユーモア小説にでも書かれて以来拡がったのかどうかは知らないが」と始まっており、「三等重役」と「恐妻」の関連を当時の人が認識している様子もうかがえる。その後、『朝日新聞』一九五二年一月二一日付の「今日の問題」には、「恐妻と愛妻」という題で、日本愛妻会結成についての文章が載っている。

「日本愛妻会」と称するのが結成され、「心なき男性の■」（注―判読不能）した恐妻会に対抗して、目覚めたる良人族として、かよわき女性に愛の手をさしのべん」というのを、その主旨とするそうだ。「恐妻会」などといったところが、細君に頭があがらないこと、あるいは、頭があがらないように見せかけることによって、原稿かせぎや講演かせぎをやるのを主旨としているようなところもないではないが、結局はこれも愛妻の一つの型と見るべきであろう。

ここでは、日本愛妻会が恐妻会に対抗する機関として結成されているのに対し、「恐妻」は「愛妻の一つの型と見るべき」だとしている。先述した宮本小次郎「恐妻・愛妻家列伝」でも日本愛妻会の話題が取り沙汰されているが、宮本もまた「『愛妻会』というのは、明らかに『恐妻』の一変種である。」と述べている。さらに、丸木砂土も『殿方草紙』（要書房、一九五三年）で「恐妻」について次のように述べている。

妻恐るべし、などというほど恐ろしい日本の女は、決しておりはしません。妻が恐ろしい、という意味は、妻

愛すべしという意味と同じで、ただ女房が可愛いというのを、阿部、大宅良先生、小野（注―佐世男）画伯あたりはテレくさいもので、妻恐るべし、と逃けているので、恐妻、実は愛妻であることに間違いありません。旦那様のおノロケに過ぎないのです。

このような愛妻と恐妻が表裏一体であるという考えは、この後も新聞などで多く語られている。このことから、源氏や近藤らが示したような「恐妻家」＝「愛妻家」という考えが当時の人々に受け入れられ、浸透していたことがわかる。

阿部や近藤らは、「恐妻」となる原因を、妻側に明らかな欠点や問題を設定することから、「中年男の通有性」である夫側の浮気心などによる後ろめたさ・葛藤へと切り替えることにより、多くの夫婦に当てはまるものへと変化させた。また、源氏は「三等重役」において、これまで「嬖天下」という言葉で表現していた妻が家庭の実権を握っている状態を表す言葉を「恐妻家」へと切り替えるとともに、「恐妻家」を浮気心やヘソクリを作りたいといった後ろめたさを持つ「愛妻家」の言い換えであるとした。

「恐妻」という言葉は戦後多くの夫婦にあてはまるものとなったことに加え、「恐妻家」と「愛妻家」が表裏一体のものであるという考えが当時の人々の共感・関心を呼んで広く受け入れられたことにより、流行語化したのではないだろうか。

## おわりに

ここまで見てきたように、「恐妻」という言葉は一九二四年には既に使われていた言葉であり、流行した一九五

二年に作られた新語ではないことが明らかになった。また、戦前と戦後の用例を比較した際、戦前の「恐妻」は妻に明確な問題がある家庭において使用されるという限定的なものであったが、戦後の「恐妻」は、妻が家庭の実権を握っている状態を示す言葉であり、「嬬天下」の同義語として用いられていることがわかった。夫が妻を恐れる理由も浮気「心」に過ぎず、それ故多くの夫婦に該当する言葉となり、流行したと言える。さらに、戦後の「恐妻」のもう一つの特徴は「愛妻家」と結び付けられ、表裏一体のものとして扱われていることである。これは戦前の「恐妻」には見られなかった傾向であり、そこにワダが指摘する「「恐妻」「恐妻家」という言説・表象が戦後的であるとされる」理由があるのではないかと考えられる。一でも述べたように、「恐妻」の流行の背景には、アメリカの夫婦像・家庭観の影響があると思われる。当時流布されたアメリカの家庭像は、まさに妻が家庭の実権を握っている状態であり、それを昔から日本に存在した家庭像である「嬬天下」や「恐妻」という言葉を用いて表現することで、当時の人々に新しい思想を受け入れやすいようにしたのではないだろうか。とくに「三等重役」が定義付けた「恐妻」には、アメリカの夫婦関係の影響が色濃く感じられる。「三等重役」と戦後民主主義的な要素との関わりについての詳しい論考は、別稿を期したい。

〔注〕

- (1) 尾崎秀樹「戦後ベストセラー物語 27」『朝日ジャーナル』第八卷第一七号、一九七五年四月
- (2) 山本嘉次郎は「戦争前の恐妻家と戦後の恐妻家とは、一寸意味がちがつて来ましたね。」(山本嘉次郎、源氏鶏太、小野佐世男「恐妻学教室」『面白倶楽部』光文社、一九五二年七月)と、戦前に「恐妻家」という言葉があったという考えを示している。一方で、乾孝は「「恐妻」というような言葉のまだできないころ(た

しか一九五一年ごろ）（乾孝編『日本は狂っている 戦後異常心理の分析』同光社磯部書房、一九五三年）と回想しており、戦後発明された言葉であるとしている。

- （3） ミツヨ・ワダ・マルシアーノ「（再）定義される労働力——貫戦史でのサラリーマン映画」『戦後』日本映画論』青弓社、二〇一二年

- （4） 佐々木邦「恐妻病者」『佐々木邦全集』第八卷、大日本雄弁会講談社、一九三一年

- （5） 佐々木邦「主権妻権」『佐々木邦全集』第六卷、大日本雄弁会講談社、一九三一年

- （6） 近藤日出造「恐妻会覚書」『恐妻会』朋文社、一九五五年